

日本語母語場面と中国語母語場面における意見交換会話の特徴 —自発的 turn に見られる明示的引き継ぎに注目して—

白石 恵利奈

【要旨】

本稿は、日本語母語場面と中国語母語場面における意見交換会話のスタイルを明らかにすることを目的としている。そのために、自己選択と割り込みのいずれかによって取られた「自発的 turn」について、直前の相手の turn に出てくるワードやフレーズを自分の turn で再度出現させる「明示的引き継ぎ」に注目して分析した。その結果、明示的引き継ぎのある turn の数については、日本語母語場面と中国母語場面の間に有意差はないが、明示的引き継ぎのない turn の数については日本語母語場面の方が中国語母語場面よりも多いことが明らかになった。さらに、明示的引き継ぎが1つ出現した turn の数と明示的引き継ぎが2つ出現した turn の数は日本語母語場面と中国母語場面の間に有意差はないが、明示的引き継ぎが3つ以上出現した turn の数には日本語母語場面よりも中国語母語場面の方が多いことがわかった。これらの分析結果と文字化データから、日本語母語場面の会話は発話の内容よりも人間関係を重視するため、自分の意見を述べるよりも、フォロー、先取り、補足、コメント等のストラテジーを駆使して、円滑なコミュニケーションを行うスタイルであり、中国語母語場面の会話では、自らの考えを主張し、積極的に意見交換を行いながらも、明示的引き継ぎを多用することで直前の相手 turn に関わりのある発話をするスタイルではないかと考察した。

【キーワード】

日中母語場面、日本語母語場面、中国語母語場面、自発的 turn、明示的引き継ぎ、turn-taking

1 はじめに

近年日中の行き来は非常に盛んになっている。そのため、日本人、中国人ともに、母国にいても日中の接触場面に遭遇する可能性が少なくない。このような異文化、異言語の接触場面においては母語場面以上に双方の誤解や摩擦が生じやすくなる。母語が違うということは、言語だけではなく、会話のスタイルも違うからである。

例えば、賈 (2008) によると、複数名で会話をする際、日本語母語話者はその時話している人が話し終わるのを待ってから話始めることが多い。一方、中国語母語話者はその時話している人の話が終わるのを待たず、割り込むような形で自らの話を始めることも少なくない。また、李・松崎 (2009) によると、交渉場面においては、日本語母語話者が相手

の立場への理解を示す「共感型」であるのに対し、中国語母語話者は自分の主張に有利な意見を表明する「説得型」だと言われている。

このような会話のスタイルの違いが接触場面では大きな誤解につながりかねない。例えば、日本語母語話者は中国語母語話者が話の途中で割り込むことについて、話を聞いていないと誤解する可能性がある。反対に、中国語母語話者は日本語母語話者が共感ばかりすることについて、自分の意見がないと誤解する可能性がある。このような誤解を減らすためには、まず自分と相手の会話のスタイルの違いを知る必要がある。

そこで本稿では、日本語と中国語の会話のスタイルの違いを明らかにするために、まず会話の場面として、誤解や摩擦が生じやすい意見交換場面の会話を設定する。ここでの意見交換場面とはあるテーマについて異なる意見を持った二人が会話する場面を指す。分析する会話データは自発的 turn に限定する。他の会話参加者から渡された turn については分析の対象外とする。なぜ自発的 turn に限定するかというと、他の会話参加者から渡された turn は、基本的に質問や同意要求に対する返答が求められるが、自発的 turn においては発話の内容が制限されることがないという理由から、日本語母語場面と中国語母語場面の違いが顕著に出ると考えたためである。

本稿では、直前の相手の turn に出てくるワードやフレーズを自分の turn で再度出現させることを「明示的引き継ぎ」と呼ぶ。そして、この「明示的引き継ぎ」という観点から日本語母語場面と中国語母語場面の自発的 turn における直前の相手の turn への関わり方を明らかにする。さらに、明らかになった両者の特徴を比較することで、両者の違いについても検討したい。

2 先行研究と本研究の位置づけ

2-1 用語の定義

本稿で使用する用語について以下のように定義する。

- ・ turn : 「会話において一人の話者が話す権利を行使するその会話中の単位で、会話の当事者によりその何らかの意味または機能を持っていると認められたもの (メイナード 1992:56) 」
- ・ turn-taking : 「話し手と聞き手両者とも発話の順番を取る者が何かを言うことを認め、それを補う形で聞き手」が「聞き手の役目をひき受け」た時に起こる現象 (メイナード 1992:56) 。
- ・ 自発的発話: 自己選択および割り込みによって自発的に turn を取ったと認められる発話。
(「自己選択」と「割り込み」については 4-1 「表 2 turn の取り方の分類」を参照)
- ・ 自発的 turn : メイナードが定義する turn のなかで、自発的発話によってはじまるもの。
- ・ 明示的引き継ぎ : 直前の相手の turn に出てくるワードやフレーズを自分の turn で再度出

現させること。明示的引き継ぎは、相手の発話をそのままくり返したものだけでなく、言い換えたり、指示詞を使ったりすることによって相手の発話内容を引き継ぐことも含む。

2-2 日本語と中国語の会話における対照研究

日本語と中国語の会話における対照研究には、話題開始に注目した楊 (2011)、話題終了に注目した楊 (2007)、ターン交替(本稿の定義では *turn-taking*) と他者選択の仕方に注目した賈 (2008)、会話のスタイルに注目した李・松崎 (2009) と張 (2010) が挙げられる。先行研究で指摘された特徴をまとめると、日本語母語話者は人間関係を重視し、相手の様子を窺いながら協同的に会話を進行する特徴があり、中国語母語話者は発話の内容を重視し、お互いに主張することで会話を進行する特徴があると言えることができる。

これまでの日本語母語場面と中国母語場面の会話における対照研究では、話題開始・終了、ターン交替、他者選択、会話のスタイルといった様々な視点から分析されていたが、いずれも自発的 *turn* と非自発的 *turn* を区別せず、両者を合わせて分析されていた。ターン交替に注目した研究も、どのようにして *turn* を取るかという *turn* の取り方の観点から研究されたものであり、本稿で扱う自発的 *turn* 内で何が起きているかを明らかにしたものはなかった。

2-3 自発的 *turn* についての研究

本研究で扱う自発的 *turn* と同様の定義を用いた先行研究は見られなかった。しかし、自発的 *turn* と近い定義を持つ「自発的な発話 *turn*」については、日本語母語場面および、韓国語母語場面ですでに研究されている。

例えば、初鹿野 (1998) では、日本語母語場面では討論とインタビューにおける「自発的な発話 *turn*」について研究されている。また、李 (2002) では、日本語母語話者と韓国人日本語学習者を対象に「日本語母語場面」、「韓国語母語場面」、「接触場面」の議論の会話について初鹿野 (1998) の「自発的な発話 *turn*」の定義を用いて研究されている。

「自発的な発話 *turn*」とは「話者が話を続けているとき、その発話に重なって、または、発話が話者の息継ぎなどで区切れた瞬間に、次の話者がターンを取ろうと試みている発話(初鹿野 1998, p.149)」である。つまり、「自発的な発話 *turn*」は割り込みで取った *turn* のみを指すが、自発的 *turn* は割り込みで取った *turn* に加えて、自己選択で取った *turn* が含まれるという点において定義が異なる。なぜなら、「明示的引き継ぎ」は、割り込みで取った *turn* のみで見られる現象ではないと考えたからだ。自己選択で取った *turn* にも当然出現する。そのため、自発的 *turn* には割り込みに加えて、自己選択を分析の対象を割り込みで取った *turn* に限定する必要はないと考える。

2-4 明示的引き継ぎの研究

先行研究では、明示的引き継ぎについて研究したものはなかったが、明示的引き継ぎの一部であるくり返し（反復表現）についての研究は見られた。

例えば、遠藤 (2006)、福富 (2010) では、くり返しにおける日本語母語話者と日本語学習者の特徴について分析されている。また、松田 (1998) では反復表現の現れ方について対話機能の観点から分析されている。さらに、岡部 (2003) では、課題解決場面におけるくり返しの機能について、福富 (2010) では「趣味について話す」というテーマの会話におけるくり返しの機能について明らかにされている。松田 (1998)、岡部 (2003)、福富 (2010) では、いずれもくり返しの現れ方や機能といったくり返しそのものの性質を明らかにすることを目的とされていた。しかし、本稿ではくり返しの性質について明らかにすることを目的とするのではなく、日本語母語場面と中国語母語場面の会話のスタイルを明らかにすることを目的とし、くり返しを含む明示的引き継ぎが確認できる turn 全体に注目する。

2-2 から 2-4 の先行研究を踏まえて、本研究では、日本語母語場面と中国語母語場面の自発的 turn に注目したい。そして、自発的 turn が直前の相手の turn にどのように関わっているのか、明示的引き継ぎを含む turn 全体を見て日本語母語場面と中国語母語場面それぞれの特徴を明らかにした上で、両者の差異についても検討する。

3 調査

3-1 調査対象と調査期間

調査対象者は、日本語母語話者、中国語母語話者ともに、2名1組で10組ずつ、計40名である。いずれも対象者は10代後半～20代前半の女子大学生である。会話参加者2名の関係は、日本語母語話者の場合は所属ゼミが同じであること、中国語母語話者の場合はクラスが同じであることを条件とした。このような条件を設定したのは、調査対象である日本語母語話者の大学にはクラスがなく、中国語母語話者の大学にはゼミがなかったためである。いずれの対象者にも親しい友人と2人ペアで応募してもらったため、条件は違うが、かなり親しい関係であることに変わりはない。

日本語母語場面の調査は2014年10月と2015年5月に行い、中国語母語場面の調査は2014年5月に行った。

3-2 調査の手順

まず、調査対象者に「研究データ公開承諾書」及び「調査票」の記入をしてもらう。記入が終わったら、筆者は会話のテーマと会話をする時間について簡単に説明し、ICレコーダーの動作確認をした後、部屋の外で待機する。調査対象者には、筆者が部屋から出たタ

イメージで筆者が提示した会話のテーマに沿って会話をはじめてもらおう。そして、15分程度経った会話の切りの良いところで話を終わらせてもらおう。話が終わったら、部屋の外にいる筆者に声をかけてもらい、筆者が録音を終了させる。

3-3 会話のテーマ

「調査票」に会話のテーマを決めるための質問を6つ載せ、調査対象者には全ての質問に対して「A」か「B」の2択で回答してもらった。そのうち、会話に参加する対象者2名の意見が異なる質問をそのペアの会話のテーマとした。調査票の質問は表1の通りである。

表1 調査票の6つの質問

①	「成功するために重要なのは、生まれつきの才能である」という意見に賛成か、反対か。(A 賛成・B 反対)
②	「自分に合わない会社は、できるだけ早く辞めた方がいい」という意見に賛成か、反対か。(A 賛成・B 反対)
③	「自由な人生を送る為に、結婚しても子供を作らない」という意見に賛成か、反対か。(A 賛成・B 反対)
④	友達を選ぶ時、自分とよく似ている人を選ぶべきか、自分とは性格や趣味が違う人を選ぶべきか。(A よく似ている人・B 性格や趣味が違う人)
⑤	今社会に求められているのは、幅広い知識か、専門的な知識か。 (A 幅広い知識・B 専門的な知識)
⑥	もしもう一度生まれ変わるとしたら、男性を選ぶか、女性を選ぶか。 (A 男性・B 女性)

3-4 文字化の方法

会話が始まってから10分間を文字化する対象とした。時間を限定したのは、統計の便宜上、すべてのデータの時間的を統一するためである。10分間という時間は、収集したデータの中で最も会話時間が短かったものに合わせた。文字化の際、日本語母語話者20名および中国語母語話者20名はそれぞれJ1~J20、C1~C20と表記する。そして、日本語母語場面の10の会話および中国語母語場面の10の会話はそれぞれJJ1~JJ10、CC1~CC10とする。

文字化の方法は、基本的に宇佐美(2007)の「改訂版：基本的な文字化の原則」に従った。「改訂版：基本的な文字化の原則」では、「発話文」を基本的な分析の単位としている。宇佐美(2007)は「発話文」を「会話と言う相互作用の中における『文』」と定義し、「基本的にひとりの話者による『文』を成している」と捉えられるものを1発話文と認定している。また、構造的に「文」が簡潔していない発話では、話者交替や間などを考慮した上で「1発話文」であるかを判断している。本稿でも「改訂版：基本的な文字化の原則」

に従い、「発話文」を基本的な分析の単位とする。「改訂版：基本的な文字化の原則」では、話者が交替するたびに改行する。また、話者が交替しなくても「発話文」ごとに改行するのが原則となっている。本稿でも、基本的にはこの方法に従うが、分析の便宜上、次の(1)、(2)の場合において一部改行方法を変更する。

- (1) あいづち的な発話＋実質的な発話からなる発話文はあいづち的な発話の後で改行する。
- (2) 一つの発話文内に複数の発話機能が見られる場合、発話機能が変わる場所で改行する。

「あいづち的な発話」とは「『ハー』『アー』『ウン』『アーソウデスカ』『サヨーデゴザイマスカ』『エーソーデスネー』などの応答詞を中心にする発話」や「先行する発話をそのままくりかえす、オーム返しや単純な聞きかえしの発話」、「『エーッ!』『マア』『ホー』などの感動詞だけの発話」、「笑い声」、「実質的な内容を積極的に表現する言語形式（たんなるくり返し以外の、名詞、動詞など）を含まず、また判断・要求・質問など聞き手に積極的なはたらきかけもしないような発話」のことを指す（杉戸 1987:88）。実質的な発話とは「あいづち的な発話以外の種類の発話」や「なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含み、判断、説明、質問、回答、要求など事実の叙述や聞き手へのはたらきかけをする発話」のことを指す（杉戸 1987:88）。

中国語母語場面のデータについては、談話分析を専門とする中国人の大学院生¹が宇佐美(2007)を使って文字化した。また、中国語の日本語訳は日本語教育を専門とする別の中国人大学院生²が行った。

4 分析方法

4-1 自発的 turn の認定

自発的 turn を認定するにあたり、まずは turn の取り方を分類する。分類方法は Sacks, Schegloff and Jefferson (1974:704) の「turn-taking の規則」を参考にした。「turn-taking の規則」では turn の取り方を「他者選択」、「自己選択」、「自己継続」の3つに分類しているが、本稿ではこの3つ以外に「割り込み」と「失敗」という2つの分類を設けている。

それぞれの turn の取り方についての説明と例を、表2に示す。「turn の取り方」の具体例は「例」の下線に示す。

表2 turnの取り方の分類

turnの取り方	説明	例
自己選択	前の話し手によって次の話し手が選択されなかった場合に、前の話し手以外の会話参加者が自ら話し始めることによってturnを取る。turnを取る際、「意図せずに起こる重複」が起きても自己選択と見なす。発話順番の取得表示としてあいづち的な発話をした後、自ら話し始めることでturnを取った際は、あいづち的な発話も後に続くturnの一部とする。	J17: 私は幅広い知識かなーって。 J18: <u>あー、私専門的な知識。</u>
割り込み	相手のturn内で意図して割り込み、発話を続けることでturnを奪取すること。発話順番の取得表示としてあいづち的な発話をした後、自ら話し始めることでturnを取った際は、あいづち的な発話も後に続くturnの一部とする。	J3: あ、そっちのほうが絶対いい > {<} 【。 J4: <u>】 <そう> {>}、それ、それ食べ、食べれるらしい。</u>
他者選択	前の話し手から「指名」や「質問」等によって次の話し手として選択されることでturnを取る。	J4: えっとー (えー)、じゃあじゃあなんで、J、J3さんは幅広い知識を選ばれたんですか？。 J3: <u>なんでだっけな、ちょっと忘れちゃった。</u>
自己継続	自己選択も他者選択も起こらない場合に、今の話し手がturnを継続させること。	J16: <u>自分が部下を従わせてるんだ、ね。</u> /沈黙5秒/ J16: <u>んー、会社だけじゃなくて、多分バイトとかも一緒だろうね。</u>
失敗	turnを取ることに失敗し、相手にturnを譲ること。	J7: 違う人は別に、なに、批判とか排除とかもしない、からー、なんだろう。 J8: <u>まあ、なんで=。</u> J7: =友達、とって仲良くなるんだったら似てる人かなっていう。

日中両データの全てのturnを表2の5つに分類したところ、表3のような結果になった。

表3 turnの取り方結果

	自己選択	割り込み	他者選択	自己継続	失敗	合計
日本語	425	54	190	18	20	669
中国語	299	51	89	0	10	439

表3のうち、日本語データにおける425例の自己選択のturnと54例の割り込みのturnの計479例、および中国語データにおける299例の自己選択のturnと51例の割り込みのturnの計350例を自発的発話とする。本稿では、直前の相手のturnからの明示的引き継ぎを見るため、前のturnと今のturnの話し手が変わらない自己継続と、明示的引き継ぎを分析するだけの発話量のない「失敗」は分析の対象外とする。

4-2 明示的引き継ぎの認定方法

本稿では、明示的引き継ぎの方法について「くり返し」、「言い換え」、「指示詞」の3つがあると考え、明示的引き継ぎの分類について詳しくは表4にまとめる。例の下線部は明示的引き継ぎを示す。

表4 明示的引き継ぎの分類

引き継ぎ方	説明	例（網掛け部分が明示的引き継ぎ）
くり返し	直前の相手のturnの「発話（あるいはその一部）を用いて行った発話であり、くり返されたもとの発話の要素を一部あるいは全部含むもの」（福富2010）。くり返されたもとの発話の意味・内容を保持した多少の言い換え（語順の変更、発話末の変更など）、外来語や外国語から日本語へのパラフレーズ（あるいはその逆）、漢語から和語（あるいはその逆）のパラフレーズも含む。	J6：随分変わったね。 J5： <u>変わったね</u> <2人で笑い>。 鬱病になっちゃったら。
言い換え	直前の相手のturnの発話（あるいはその一部）を別の言葉に言い換えて引き継いでいるもの。くり返されたもとの発話の要素は含まない。具体的には「彼（彼女）」など相手の発話内に出た事柄を簡潔な言葉で言い換	J1： <u>才能はあったけど（うん）、成功してない人もいる</u> —んだらうね（そうだね）、活かしきれなかったっていうかさ。 J2： <u>そういう人</u> の方が多いのかな？。

	えたり、「今の話」のように相手の発話を一言で言い換えたりする。「その人」のように指示詞+名詞で言い換える場合も含む。	
指示詞	直前の相手の turn の発話（あるいはその一部）を指示詞で示して引き継いでいるもの。	J4：なんか、え、他の子はなんか <u>和菓子</u> の製造とかいう J3：あ、 <u>そっち</u> のほう絶対いい。

自発的 turn の中に明示的引き継ぎがあるか否かを判断するため、すべての自発的 turn において、表4の「明示的引き継ぎの分類」に当てはまるものがあるかを検討する。検討するにあたり、以下の(1)と(2)の規則を使用する。

- (1) 一発話文内に明示的引き継ぎが複数見られる場合、1つずつカウントする。
- (2) 言いよどみや言い直し、独り言のように同じ言葉を繰り返す等、同一発話文内に同じような明示的引き継ぎが複数回出現する際はまとめて1つとしてカウントする。

(1)と(2)の規則に従って、自発的 turn の中に出現する全ての語句に対して明示的な引き継ぎがあるか否かを判断した結果、表5のようになった。

表5 直前の相手の turn の発話（あるいはその一部）の引き継ぎ方結果

	くり返し	言い換え	指示詞	合計
日本語	165	7	31	203
中国語	360	41	23	424

「明示的引き継ぎ」だと判断された語句が turn 内に1つでも見られる場合、その turn を「明示的引き継ぎのある turn」とし、1つも見られない場合はその turn を「明示的引き継ぎのない turn」とする。

5 分析結果と考察

5-1 明示的引き継ぎの有無

4章の分析方法に従って明示的引き継ぎのある turn と明示的引き継ぎのない turn を確認した。その結果、明示的引き継ぎのある turn の数を表6、明示的引き継ぎのない turn の数を表7に示す。「日」は日本語母語場面、「中」は中国語母語場面を表している。

表6 明示的引き継ぎのある turn の数

日本語母語場面										
JJ1	JJ2	JJ3	JJ4	JJ5	JJ6	JJ7	JJ8	JJ9	JJ10	合計
36	32	11	31	25	9	15	8	18	15	200
中国語母語場面										
CC1	CC2	CC3	CC4	CC5	CC6	CC7	CC8	CC9	CC10	合計
27	41	37	36	7	7	16	8	14	9	202

表7 明示的引き継ぎのない turn の数

日本語母語場面										
JJ1	JJ2	JJ3	JJ4	JJ5	JJ6	JJ7	JJ8	JJ9	JJ10	合計
41	49	25	37	21	19	13	20	36	18	279
中国語母語場面										
CC1	CC2	CC3	CC4	CC5	CC6	CC7	CC8	CC9	CC10	合計
32	15	28	27	7	1	14	7	16	1	148

日本語母語場面および、中国語母語場面の明示的引き継ぎのある turn と明示的引き継ぎのない turn を比較して有意差があるかを見るために、統計の手法を使って確認した。今回の検定にかける数値は 10 分間の会話の中で起きた明示的引き継ぎのある turn と明示的引き継ぎのない turn の数であり、その数に上限や下限はない。そのため、T 検定などの母集団のデータが特定の分布に従うことを前提としたパラメトリック手法を使用することはできない。そこで、母集団のデータが特定の分布に従っている必要のないノンパラメトリック手法を使用した。さらに、今回検定にかける会話データの明示的引き継ぎがある turn を 1 群、明示的引き継ぎのない turn を 2 群とした時、同じ会話の 1 群と 2 群の間には対応関係がある。そこで、対応関係のある 2 つを比べるノンパラメトリック手法の検定であるウィルコクソンの順位和検定を使用した。その結果、日本母語場面の明示的引き継ぎのある turn と明示的引き継ぎのない turn の間には有意差があった ($T=4$, $p=0.0166$)。一方、中国語母語場面の明示的引き継ぎのない turn と明示的引き継ぎのある turn の間には有意差がなかった ($T=6$, $p=0.0390$)。つまり、日本語母語場面においては明示的引き継ぎのある turn よりも明示的引き継ぎのない turn の方が多いが、中国語母語場面においては明示的引き継ぎのある turn と明示的引き継ぎのない turn の間に有意差がないということになる。

次に日本語母語場面と中国語母語場面それぞれの明示的引き継ぎのある turn の数および、明示的引き継ぎのない turn の数の間に有意差があるかを確認した。今回の検定にかける数値も 10 分間の会話の中で起きた明示的引き継ぎのある turn と明示的引き継ぎのない

turn の数であり、その数に上限や下限はない。そこで、母集団のデータが特定の分布に従っている必要のないノンパラメトリック手法を使用する必要がある。しかし、今回は比較するデータの間に対応関係がない。例えば、JJ1 と CC1 は同じ「1」という番号が割り振られているが、対応関係はない。そこで、対応関係のない2つのデータを比べるノンパラメトリックの手法であるマンホイットニーの U 検定を使用した。その結果、日本語母語場面の明示的引き継ぎのある turn の数と中国語母語場面の明示的引き継ぎのある turn の数には有意差がなかった ($U=46.5, p=0.7910$)。一方、日本語母語場面の明示的引き継ぎのない turn の数と中国語母語場面の明示的引き継ぎのない turn の数には有意差があった ($U=21.0, p=0.2825$)。つまり、明示的引き継ぎのある turn の数においては、日本語母語場面と中国語母語場面の間に有意差がないが、明示的引き継ぎのない turn の数においては、日本語母語場面の方が中国語母語場面よりも多いということである。

では、なぜ日本語母語場面では明示的引き継ぎのない turn が多いのだろうか。例 1~4 は実際のデータで見られた明示的引き継ぎのない turn の一例である。

【例 1】

J4	普通透明人間になりたいって言ったらね。
J3	そうそうそう、ね。
J4	なんか。
turn 交替	
J3	ちょっと邪な思いが (そう<笑い>) ある (うん) 可能性が。

例 1 では、J4 が「なんか」と言いかけたところで、J3 が turn を取っている。そして、J3 の発話の内容を見ると、J4 が言おうとしたことを先取りしていることがわかる。J3 の turn 内で J4 が「そう」や「うん」というあいづち的な発話によって同意を示していることから、先取りした内容は J4 が言いたかったことと大差なかったと考えられる。

【例 2】

J8	部活とか美術部<笑い>だと、やっぱそういう、なんていうんだろうな。
turn 交替	
J7	まあ、おんなじような (そうそうそうそうそう)、絵描くのが好きっていう共通の<あれがね> {<}。

例 2 では、J8 が言いたいことを上手く言葉にすることができず「なんていうんだろうな」と考えているとき、フォローするように J7 が turn を取っている。J7 の発話内で J8 が「そうそうそうそう」と強く同意していることから、J7 は J8 が言いたかったことを理

解した上で、J8に代わって説明をしていることがわかる。

【例3】

J11	え、でも(うん)、え、でもそれ、うん、それでも、成功、する為…,,
J12	生まれつき>{<}。
J11	{>}<に>重要なのは【。
turn 交替	
J12	】才能だってこと？。

例3では、J12が割り込むようにturnを取っている。さらに、J12の発話を見ると、J11が話している途中で、今まさに言おうとしたことを先取りしていることがわかる。

【例4】

J9	ちょっと特殊な感じに。
turn 交替	
J10	うん、 なっちゃうから(うん)。

例4は、J9が話し終わったところで、J9がturnを取り、すでに終了したJ9の発話を補っている様子が窺える。

例1から例4に共通して言えることは、turnを取った者が相手の言おうとしたことをフォローしたり、先取りしたり、補足したりして協同的に会話を進めようとしているということである。

日本語母語場面の会話では、意見交換においても協同的に会話を進める場面が見受けられる。そのとき、相手の発話内の要素をくり返すのではなく、相手が言わなかったことや言えなかったことを相手の代わりに述べている。そのために、日本語母語場面では、明示的引き継ぎのないturnが多くなっているのではないかと考える。

5-2 1つのturn内に明示的引き継ぎがいくつ出現するか

turnを取ってから次のturn-takingが起こるまでの発話文のまとまりを1つのturnとした時、1つのturnの中にいくつ明示的引き継ぎが出現したのかをカウントした。明示的引き継ぎが1つ出現したturnの数を表8、明示的引き継ぎが2つ見られたturnの数を表9に示す。明示的引き継ぎが3つ以上見られたturnは数が少なかったため、3つ以上をまとめて表10に示す。

表 8 明示的引き継ぎが1つ出現した turn の数

日本語母語場面										
JJ1	JJ2	JJ3	JJ4	JJ5	JJ6	JJ7	JJ8	JJ9	JJ10	合計
31	25	9	29	17	7	11	8	15	14	166
中国語母語場面										
CC1	CC2	CC3	CC4	CC5	CC6	CC7	CC8	CC9	CC10	合計
23	23	20	26	4	0	7	2	7	1	113

表 9 明示的引き継ぎが2つ出現した turn の数

日本語母語場面										
JJ1	JJ2	JJ3	JJ4	JJ5	JJ6	JJ7	JJ8	JJ9	JJ10	合計
4	5	2	1	7	2	1	0	3	1	26
中国語母語場面										
CC1	CC2	CC3	CC4	CC5	CC6	CC7	CC8	CC9	CC10	合計
4	11	10	7	1	2	2	2	4	0	43

表 10 明示的引き継ぎが3つ以上出現した turn の数

日本語母語場面										
JJ1	JJ2	JJ3	JJ4	JJ5	JJ6	JJ7	JJ8	JJ9	JJ10	合計
1	2	0	1	1	0	3	0	0	0	8
中国語母語場面										
CC1	CC2	CC3	CC4	CC5	CC6	CC7	CC8	CC9	CC10	合計
0	7	7	3	2	5	7	4	3	8	46

明示的引き継ぎが1つ出現した turn の数、明示的引き継ぎが2つ出現した turn の数、明示的引き継ぎが3つ以上出現した turn の数について日本語母語場面と中国語母語場面の間に有意差があるかマンホイットニーのU検定で確認した。その結果、日本語母語場面と中国語母語場面の明示的引き継ぎが1つ出現した turn の数には有意差がなかった ($U=30.0$, $p=0.1298$)。また、明示的引き継ぎが2つ出現した turn の数にも有意差がなかった ($U=37.5$, $p=0.3380$)。しかし、明示的引き継ぎが3つ以上出現した turn の数には有意差があった ($U=10.0$, $p=0.002$)。つまり、明示的引き継ぎが1つ、2つ出現した turn の数においては日本語母語場面と中国語母語場面の間に有意差はないが、明示的引き継ぎが3つ以上出現した turn の数においては日本語母語場面よりも中国語母語場面の方が多いということである。

明示的引き継ぎが1つ出現した turn の数については日本語母語場面と中国語母語場面の間に有意差がなかったが、日本語母語場面において明示的引き継ぎが1つ出現した turn の数が明示的引き継ぎのある turn 全体の80%以上を占めることは特徴的であると言える。では、なぜ日本語母語場面では明示的引き継ぎが出現する多くの turn において明示的引き継ぎが1つしか出現しないのだろうか。

以下の例5と例6は日本語母語場面で明示的引き継ぎが1つ出現する turn である。例の下線部は明示的引き継ぎを示す。

【例5】

J3	あ、そう、今思い出したんだけど、(うん)
	まあ専門的な知識だと、まあ専門的な知識っていうか知識に限らず、なんか思考で思ったんだけど(う、うん)、
	考え方(う、うん)、一つの考え方しかしないとさ、(うん)なんか、やっぱ、なに、事件とか起きるっていうか。<笑い>
turn 交替	
J4	意味分かんない <u>それ</u> 。<2人で笑い>

例5では、「それ」という指示詞を用いて直前のJ3のturnで話している内容全体を引き継いでいる。また、J4の発話を見ると、J3の発話に対するコメントであることがわかる。

【例6】

J10	ふんわり。(ふんわり)
	<u>女性</u> の方がいいかなーみたいな。(ふんふんふん、そっか)
	仕事とかだとさ、男性の方が未だにさ、優勢<っていうか> {<}。
J9	{>} <そうだよねー>。
J10	なんていうの？、まあ <u>女性</u> が上にいくことってなかなかまだ難しいじゃん？。
	<なんだかんだ言っても> {<}。
J9	{>} <そうだよね、そうだね>。
	うん。
J10	で、そのやっぱ仕事面を重視したら男性の方が有利かなって思うけど。(うんうん)
	でもなんか <u>女性</u> であるからこそそのさ、利点ってあるじゃん、こう。
turn 交替	
J9	=たしかになんかあれだよね。
	こう、 <u>女の人</u> の方がさ、なんかこう心の余裕的な、そのなんだろ、人生の中で(う

んうん)、持てるかも。
そうだよね。

例6では、J9が直前のJ10のturn内に出現する「女性」という言葉を「女の人」と言い換えて引き継いでいる。J9の発話を見ると、こちらも例5と同様に直前の相手のturn (J10のturn)の発話に対するコメントであることがわかる。

日本語母語場面の会話では、例5と例6のように、直前の相手のturnで述べられた内容に対して、明示的引き継ぎを使いながらコメントしているというケースが多数確認できた。日本語母語場面においては、明示的引き継ぎが出現するturnも、明示的引き継ぎが出現しないturnと同様に協同的に会話を進めようとしていると考えられる。

次に、中国語母語場面の特征として、日本語母語場面と比べて明示的引き継ぎが2つ、及び3つ以上出現するturnの数が多いことが挙げられる理由について考える。例7は中国語母語場面で明示的引き継ぎが2つ出現するturn、例8は中国語母語場面で明示的引き継ぎが3つ以上出現するturnの例である。例の下線部は明示的引き継ぎを表し、下線部の数字(①~④)は明示的引き継ぎのカウントを表す。

【例7】

	中国語	日本語訳
C4	<但他现在>{>}没有 <u>机会</u> 啊。	だけど、 <u>彼</u> には今は <u>チャンス</u> がないんだ。
turn 交替		
C3	就是，我觉得就是什么， <u>①机会</u> 是留给有准备的人的(<笑>），	つまり、私は、 <u>①チャンス</u> は準備している人に残されていると思う。(<笑>)
	就是说 <u>②他</u> 可能就是，面临的情况就是...【【。	つまり <u>②彼</u> が直面する状況というのは.....

C3は直前のC4のturnの「机会(チャンス)」と「他(彼)」という2つの言葉を引き継いでいる。発話の内容を見ると、C3はC4が述べた考えについて特に言及することなく、自分の考えを述べている。

【例8】

	中国語	日本語訳
C14	就像我，嗯，这种平常就是，嗯，跟 <u>兴趣</u> 相同，喜欢一样东西的人就是话比较多嘛。	私だと、うん、普段、うん、 <u>趣味</u> が同じだと、同じものが好きな人だと言葉数が多いし。
	就首先有 <u>共同语言</u> ，在有 <u>共同语言</u> 的基础上就会 <u>交流</u> ，慢慢慢慢慢慢就变成朋友了。	まずは <u>共通の話題</u> があつて、その <u>共通の話題</u> の基に <u>交流</u> し、だんだんだんだん友達になっちゃう。
turn 交替		
C13	我觉得…假如一开始，嗯， <u>①兴趣</u> 不同，没有 <u>②共同的语言</u> ，我们可以把自己的 <u>③兴趣</u> 介绍给对方，然后两个人，的 <u>④交流</u> 也会变多。	私は、もし、最初から、うん、 <u>①趣味</u> が違って、 <u>②共通の話題</u> がなかったら、自分の <u>③趣味</u> を相手に紹介することもできる。で二人の <u>④交流</u> が多くなる。

C13は、直前のC14のturnの「兴趣（趣味）」、「共同语言（共通の話題）」、「交流（交流）」という3つの言葉を引き継いでいる。また、「兴趣（趣味）」という言葉の明示的引き継ぎが2回繰り返されていることから、C13のturnには明示的引き継ぎが4つあると考える。発話の内容を見ると、やはりC13もC14の述べた考えに対して言及することなく、自分の考えを述べている。

中国語母語場面の会話では、例7と例8のように、直前の相手のturnで述べられた内容に対して言及することなく、自分の考えを述べているケースが多かった。しかし、直前の相手のturnの発話内容を無視しているわけではない。明示的引き継ぎが多用されていることから、直前の相手のturnに関わりのある発話をしていると考えられる。先行研究では、日本語母語話者は人間関係を重視し、相手の様子を窺いながら協同的に会話を進行する特徴があり、中国語母語話者は発話の内容を重視し、お互いに主張することで会話を進行する特徴があることが指摘されていた。しかし、中国語母語話者も直前の相手のturnに関わりのある発話をしていることから、日本語母語話者のように人間関係を重視していると考えられることができる。

6 まとめ

本稿では、日本語母語場面と中国語母語場面の意見交換会話における自発的turnについて、明示的引き継ぎに注目して分析した。その結果、自発的turnにおける明示的引き継ぎについて以下のことが明らかになった。

- (1) 明示的引き継ぎのある turn の数については、日本語母語場面と中国語母語場面の間に有意差はないが、明示的引き継ぎのない turn の数については日本語母語場面の方が中国語母語場面よりも多い。
- (2) 明示的引き継ぎが1つ出現した turn の数と明示的引き継ぎが2つ出現した turn の数は日本語母語場面と中国語母語場面の間に有意差はないが、明示的引き継ぎが3つ以上出現した turn の数は日本語母語場面よりも中国語母語場面の方が多い。

(1) と (2) の結果を踏まえて日本語母語場面と中国語母語場面の会話のスタイルについて考察する。

a. 日本語母語場面の意見交換会話のスタイル

日本語母語場面は中国語母語場面と比べて明示的引き継ぎのない turn が多い。明示的引き継ぎのない turn では、相手の言おうとしたことをフォローしたり、先取りしたり、補足したりするような発話を確認できた。これは、日本語母語場面では意見交換においても協同的に会話を進めるからではないかと考える。また、日本語母語場面は中国語母語場面と比べて明示的引き継ぎが3つ以上出現する turn の数が少なく、明示的引き継ぎのある turn の80%以上では明示的引き継ぎが1つしか出現していない。そこで、明示的引き継ぎが1つしか出現しない turn を見ると、直前の相手の turn で述べられた内容に対して、明示的引き継ぎを使いながらコメントしているというケースが多数確認できた。先行研究の通り、日本語母語場面では発話の内容よりも人間関係を重視するため、自分の意見を述べるよりも、フォロー、先取り、補足、コメント等のストラテジーを駆使して、円滑なコミュニケーションを行うスタイルなのではないかと考える。

b. 中国語母語場面の意見交換会話のスタイル

中国語母語場面は日本語母語場面と比べて明示的引き継ぎのない turn が少なかった。また、日本語母語場面と比べて明示的引き継ぎが3つ以上見られた turn の数が多かった。このことから、中国人は明示的引き継ぎを多用する傾向にあると言える。そして、明示的引き継ぎが3つ以上見られた中国語母語場面の会話を見ると、直前の相手の turn で述べられた内容に対して言及することなく、自分の考えを述べているケースが多かった。つまり、中国語母語場面の会話は、自らの考えを主張し、積極的に意見交換を行いながらも、明示的引き継ぎを多用することで直前の相手 turn に関わりのある発話をするスタイルだと考えられる。

このように日本語母語場面と中国語母語場面では意見交換会話のスタイルが異なる。では、日本語母語話者と中国語母語話者の接触場面ではお互いのスタイルについてどのよう

に感じるのだろうか。中国語母語話者は日本語母語話者が自分の言葉をあまり引き継がないことに対して、話を聞いているのか、あるいは理解しているのかと不安になる可能性がある。一方、日本語母語話者は中国語母語話者が積極的に言葉を引き継ぎながらも自己の意見を述べることに對して、話し相手へのフォローがなく、自分の意見ばかり言っていると感じる可能性がある。これらは日本語母語話者および中国語母語話者の性格の違いではなく、それぞれの会話のスタイルの特徴にすぎない。相手の会話のスタイルに合わせる必要はないが、お互いに相手の会話のスタイルを知っておくことで誤解を減らすことができるのではないだろうか。

7 おわりに

本稿では、日本語母語場面と中国語母語場面の意見交換会話のスタイルを明らかにするために、自発的 turn の明示的引き継ぎに注目して分析した。

しかし、日本語母語場面では明示的引き継ぎのない turn の方が多いため、明示的引き継ぎがない turn における直前の相手の turn との関わり方についても、別の観点から改めて研究する必要がある。また、明示的引き継ぎのある turn についても、その発話がどのような機能を持った発話なのか、あいづち的発話なのか実質的発話なのか等、詳しいことには触れられなかった。これらについては今後の課題としたい。

謝辞 本研究は一橋大学柳田直美先生の指導の下執筆した修士論文の一部である。修士論文執筆時はもちろんのこと、本稿を掲載するにあたり、再びご指導いただきましたことを深く御礼申し上げます。

注

- 1 2015年当時、一橋大学大学院言語社会研究科第二部門博士課程に在学していた学生
- 2 2015年当時、一橋大学大学院言語社会研究科第二部門博士課程に在学していた学生

参考文献

- 宇佐美まゆみ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese:BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』
- 榎本美香 (2009) 「3.1 ターン構成単位」坊農真弓・高梨克也 (共編) / 人工知能学会 (編) 『多人数インタラクションの分析手法』 オーム社 pp.68-81
- 王婧 (2011) 「「あいづち」の使い分けに置ける中国語話者と日本語話者の相違—情報なわ

- 張り理論の観点から」『国文学攷』210 広島大学国語国文学会 pp.1-14
- 岡部悦子 (2003)「課題解決場面における「くり返し」」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16 早稲田大学日本語研究教育センター pp.97-116
- 遠藤直子 (2006)「学習場面における教師発話、学習者発話の中の「くり返し」の機能について—2005 年度秋学期「日本語教育実践研究(3)」報告」『日本語教育実践研究』4 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.43-54
- 賈琦 (2008)「小集団討論場面における話者交替の日中対照研究」『世界の日本語教育』18 pp.73-94
- 金志宜 (2000)「turn 及び turn-taking のカテゴリー化の試み—韓・日の対照会話分析」『日本語教育』(105) pp.81-90
- 串田秀也 (2006)『相互行為秩序と会話分析』 世界思想社
- 木暮律子 (2002)「母語場面と接触場面の会話における話者交替—話者交替をめぐる概念の整理と発話権の取得」『言葉と文化』(3) pp.163-180
- 小宮修太郎 (1991)「討論会場面の会話ストラテジー」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』(6) 筑波大学 pp.145-165
- 杉戸清樹 (1987)「発話の受け継ぎ」『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相—座談資料の分析』三省堂 pp.68-106
- 泉子.K.メイナード (1993)『会話分析 (日英対照研究シリーズ)』 くろしお出版
- 張麗 (2010)「話者交替にみられる中国人と日本人の「自己主張」のスタイル：小集団ディスカッションを通して (その2)」『大正大学研究紀要. 人間学部・文学部』95 大正大学 pp.116-100
- 筒井佐代 (2012)『雑談の構造分析』 くろしお出版
- 富田英司・丸田俊一 (2000)「日常的文脈における協同推論過程では、素朴理論はどのように吟味・検討され、修正されるのか」『認知体験過程研究』9 pp.1-23
- 富田英司・丸田俊一 (2005)「曖昧な構造の協同問題解決における思考進展過程の探索的研究」『認知科学』12(2) pp. 89-105
- 初鹿野阿れ (1998)「発話ターン交代のテクニック—相手の発話中に自発的にターンを始める場合」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』(24) 東京外国語大学留学生日本語教育センター pp.147-162
- 一柳智紀 (2013)「小グループでの問題解決過程における学習者によるリヴォイシングの機能—課題構造による相違に着目して」『新潟大学教育学部研究紀要』7(1) pp.37-48
- 福富奈美 (2010)「日本語会話における「くり返し」発話について」『言語文化学研究 (言語情報編)』5 pp.105-125
- 藤井桂子・大塚純子 (1994)「会話における発話の重なり—協力的側面を中心に」『言語文化と日本語教育』6 日本語言語文化学会 お茶の水女子大学 pp.1-13

- 堀口純子 (1997)『日本語教育と会話分析』 くろしお出版
- ポリー・ザトラウスキー (1993)『日本語研究叢書 5 日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』 くろしお出版
- 松岡龍美・目黒真実・青山豊 (2010)「《日本留学試験対策》記述問題テーマ 100 [改訂版] [基礎編] ～論理的な文章に慣れよう～」 凡人社
- 松田文子 (1998)「日常談話における反復表現の機能に関する一考察」『言語文化と日本語教育』 16 お茶の水大学日本言語文化学会 pp.58-69
- 丸山岳彦、高梨克也、内元清貴 (2006)「節単位情報」『日本語話し言葉コーパスの構築法』 国立国語研究所報告 124 国立国語研究所 pp.225-322
- 御園生陽子、程田彩、Anekpongpan Watcharin [他] (2009)「討論の結論に至るまでの過程—日中談話の対照研究」『小出記念日本語教育研究会論文集』(17) 小出記念日本語教育研究会 pp.35-51
- 山田富秋 (1999)「会話分析を始めよう」好井裕明・山田富秋・西阪仰 (編)『会話分析への招待』 世界思想社 pp.1-35
- 楊虹 (2005)「話題転換研究の概観：タイプと方略を中心に」『言語文化と日本語教育 2005 年 11 月増刊特集号 第二言語習得教育の研究最前線—2005 年版』 pp.161-185
- 楊虹 (2007)「中日母語場面の話題転換の比較—話題終了のプロセスに着目して」『世界の日本語教育. 日本語教育論集』(17) 独立行政法人国際交流基金 pp.37-52
- 楊虹 (2011)「中日母語場面の初対面会話における話題開始の比較：参加者間の相互行為に注目して」『立命館言語文化研究』 22(3) 立命館大学 pp.185-200
- 吉本優子 (2004)「日本語の談話に置ける発話権交替時の発話機能と構造について」『京都精華大学紀要』 27 pp.74-84
- 吉本優子 (2006)「発話権交替時における発話機能について—日本語母語話者と日本語学習者の談話資料から」『京都精華大学紀要』 31 pp.66-74
- 李霽芳・松崎寛 (2009)「交渉場面における日本人と中国人の言語行動—母語場面と接触場面の量的分析を中心に」広島大学日本語教育研究(19) pp.55-62
- 李善雅 (2002)「議論の場に見られる turn-taking とその周辺—日本語母語話者と韓国人学習者の場合」『言葉と文化』(3) 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻 pp.145-162
- 李麗燕 (1995)「日本語母語話者の会話管理に関する一考察—日本語教育の観点から」『日本語教育』 87 pp.12-24
- 劉丹丹 (2014)「勧誘会話における中日あいづちの対照研究」『日本語教育と日本研究における双方向アプローチの実践と可能性』 第 42 章 ココ出版 pp.531-540
- Sacks,H.,E.Schengloff and G.Jefferson (1974)「A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking in Conversation」『Language 50』 pp.696-735